

サンドロ・ボッティチェッリ 《神秘の降誕》 —天使と人間の抱擁のモチーフについて—

東京藝術大学
平井彩可

《神秘の降誕》(1500—01、ロンドン・ナショナル・ギャラリー)は、サンドロ・ボッティチェッリ(c. 1444—1510)の後期活動の中核をなす重要作品であり、芸術家が署名と年記を残した唯一の現存作品として知られている。この作品を含め、1490年代以降のボッティチェッリの様式は、ドミニコ会修道士ジローラモ・サヴォナローラ(1452—98)の宗教的厳格主義への共鳴によって形成された「サヴォナローラ的神秘主義」として解釈されることが多い。《神秘の降誕》についても、シドニー・コルヴィン(1871)が本作品に付されたギリシア語銘文と修道士の思想との結びつきを指摘して以来、サヴォナローラ思想と関連付ける試みが研究の中心となってきた。

近年の先行研究の中では、ラブ・ハットフィールドの論考(1995)がとりわけ重要である。サヴォナローラ周辺の宗教思想を幅広く検討したハットフィールドは、本作品の着想源とみなし得る要素をサヴォナローラの説教や著作に新たに見出し、本作品の解釈をさらに深める重要な貢献を行なった。しかしそれでも、依然として未解決の問題は残されている。そのひとつは、本作品の前景にみられる3組の「天使と人間の抱擁」という独特なモチーフの解釈であろう。抱擁する人物像について、先行研究では人物の一人をサヴォナローラ自身とみなす考えや、黙示録第12章の二人の証人と同一視する見解などが提示されてきたが、ハットフィールドもこうした過去の見解に対して特に批判を加えていない。しかしながらいずれの解釈においても、このモチーフを説明する十分な論証がなされてきたとは言いがたいのである。

実際の作品から判断する限り、天使と抱き合う人物たちを特定の歴史的人物として同定する視覚的証拠は見いだせない。むしろ発表者は、人物たちの行為である「抱擁」に着目し、その検討を通じて本作品の解釈を補完したい。発表者は、この作品に描かれた「天使との抱擁」のモチーフは、特定人物への言及ではなく、一般的な意味での悔悛による神との和解の状態を示すものと考えている。すなわち、罪に堕ちた人間が「ゆるしの秘蹟」(Sacrament of Penance and Reconciliation)を通じて救済に至る「罪の浄化」のプロセスである。実際、ボッティチェッリがほぼ同時期に制作したダンテ『神曲』煉獄篇挿絵(1480—c. 1505)のなかにも非常によく似た抱擁のモチーフが描かれており、14—15世紀のダンテ註解書が明言しているように、ここではダンテ自身が高慢の罪を悔い改めて浄化される場面に用いられているのである。「悔い改め」は、言うまでもなくサヴォナローラ時代に特に強調された宗教的態度であった。《神秘の降誕》は、降誕図の一般的図像に前景場面を加えることで、悔悛による罪の浄化の概念を強く喚起している点に独自性が認められ、この点において同時代の宗教思潮を強く反映していると考えられる。